

時宗且大源庵へ詣す、天室小座敷へ招入茶を振舞しに、宗且風爐の灰を見て驚、再三感心して、和尚はかほどの御數寄とは曾て不存、さても能被成るもの哉と入興し歸りぬ、其後和尚庸軒に斯と物語し、其風爐の灰は、日々宗拙に頼置たりと云事もならず、其趣にて過せしが、風爐の灰は我等何とも氣も付ねども、其家の人は、これらまでも仕様有事にてや、見處有と聞たりと感心せり、〔喫茶指掌編^三〕庸軒が妹婢茶屋三四郎と云者、京川西の別莊にて常に茶を嗜、或時庸子北野社參の次手に別莊へ尋しに、三四郎云、扱善折御出なり、今日は藪内紹有を茶に呼約束せし故に、雲龍風爐を出しつるに、灰に困り居る折也、幸の事御頼申上度と強て申に付、庸子戯に、今日我等不來ば如何致さる、やと打笑て灰をせしに、無程紹有笹屋宗清兩人來て小座敷に入、風呂の内を見て大におどろき、主はこれ程の茶人にてはなしと思しに、恐入事と、中起の後までも稱嘆して不止、三四郎こらへす事實を以語れば、紹有さも有べし、庸子ならば尤也と尙感じける、庸子後に聞て、紹有が見たる處を賞て、互に後は親しく成しと也、其後紹有宗清に云るは、庸子の茶、兼て功者とのみ聞及しに、彼風爐の灰をみては、中々及まじく、此人の茶にはうかと不被行と、庸子へ行くとに、前に彼宗清懇意なれば、座敷の様子萬事を能聞正して、大事掛て行しと也、

〔槐記〕享保十一年四月十三日、灰ヲ直スコトハ、遠州流ニハ炭ノ後ニスルコトカト御尋○近衛ナリイカニモ左ヤウニ候ト申上ル御流儀ニハ風爐ノ灰ハ、炭ノ前ニスルコト也ト仰ラル、十三年五月三日、風爐ノ灰ヲスルコトハ、六ヶ敷ヤウニイヘドモ、今時ノ灰ハ、サマデムツカシキヤウニモ見エズ、灰ノ高下淺深曲直ハ、風爐ト五徳ト前ノカハラケトノ間ニヨレバ、兼テ定メガタシ、此ハ常修院殿○慈胤法親王ノ教ヘ、尤ナルコト也、大秘藏ノコト也、先風爐ニ五徳ヲロクニ入テ、眞中ニ灰ヲイカホドナリトモ入テ、ソレヲ四方ヘカキ出セバ、自ラ高下ノ出來ルヲ、又別ノ灰ニテ其高下ノナリニ灰ヲマキテ、キレイニスルバカリ也、前カワラケモ、灰ヲ大方ニ四方ヘマキテ、好カゲ